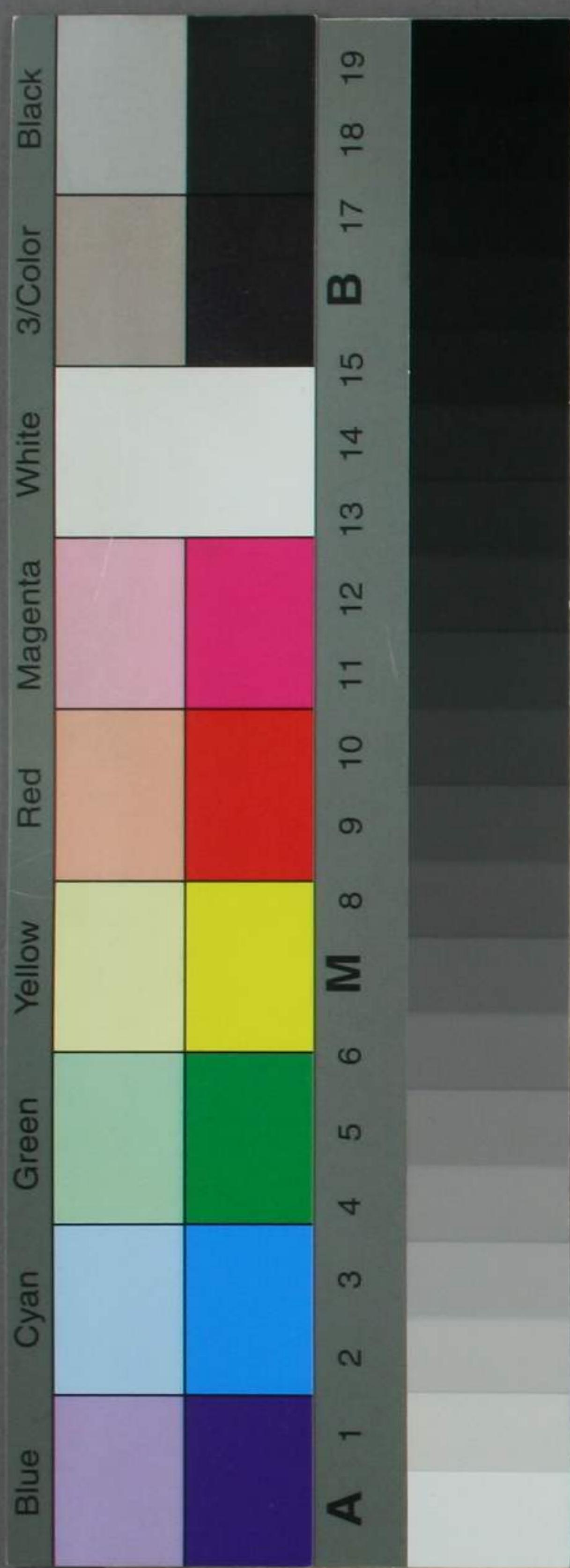


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 50m



1280  
19

柴 橋の雨笠

田中　原君車  
人が物語を夢の如くよす居たら全般の事を覺て  
勢勢と矛を起し仇より与せらる四五六の隼人友善妨害の日より  
見えん。半七り共刃を受ふと罵りつ。縁頬へ跳り下る。刀の  
鞘へ手を掛ひ、賞布の幕を手と掲ぐ。一人の武士走り来  
全般を廻り齒めて右手より引提へ小刀を抜き放さび破と打が  
全般を搔き下す。信とその顔をうち覗く。去年の春、櫻本の  
あゆみまで跡跟たれぬまゝ、慈る汝の赤根半之進、寅次の仇人  
の不。と跳葱で腰刀を抜んと手を抜く。果だ又てまと打居  
色の全般を焦燥する。組んとども手を楚と取る。早リの手  
羊の進がよし上べて寄事あり。今らの小刀を手打すからぢ

私意うりと乃ちん父順勝朝臣の後事を懲らしめ打撻まで  
呂ひゆうりあらんと切らしゆとりにて全仗うろを以ての期  
及す余を情欲つるが実父の今市全八養父の敗戦父四郎これより  
外よ親へう。戯言食はと立あづき。勝負を決せむと敦園が  
半之進竟余うち笑え君の為より一点ぢうとも余を惜ね半之進  
何狼狽う。体をあらんべく君の正しく続井の嫡男今市をを  
実の义と思ての物体う。いざあること恭く上坐推居れ厚  
倉庫へも席をす。半七もそのの頃末のあらねども父の後方小  
居うりて各位をうへ故ぞれに全仗三小や疑ひ惑ひてを  
又たつ沈吟せり當下半之進へ膝行く帝をもとめ縁故で知召  
ね疑惑へあらへ理をうり。傳より三十あまり一年をもとめ

べ。永正十二年とより春の比つ君順勝朝臣吉稚をたりし時  
積鬱を保養のため義洛へ渴ての爲りあふ。かん供の今市全八  
布施時九郎あくちうひ。半之進ゆひて。あらるに佞臣布施今市  
君よ酒をもとめ進う。義洛よ名なは白拍子歌妓舞姬を  
集合つ。長夜の飲その度よ過だり。されば百石を旅館の中小笠屋  
小夏よあすりのあり。彼の義洛の刀拭同樹とのすみ。女見ゆて実の  
名また増穂とぞ。笠屋夏よ歌妓を習ひて。ちの手を微妙  
とも。ものふれぬ弱をす。吾君不覺ふれどを絶して。右夜  
小夏成れ旅館へ止宿す。もびひつやからひあふ。小夏の元末吾  
君父続井の郎君ておもひう。その名を向べ吾君も実の名を告  
め。これ続井の近習の士。今市全八郎とぞすのと訴欺す。

二夜さかうりをかくらあふす。某よ寄詠あひへど。この物体あ  
い進止ゆべたゆとも見えぬらば。平城へまえうが。大殿の怒り  
ほき。もん身のうへひんと面を犯すと諫めゆぢ。是う  
小夏を忘れざれども君も只某をいぶせたりの小思召。市布施木  
時をぬ。諺きその間うじ。又某ハちん前を遠離られ病と  
稱し。ト宿よ籠居。ひとう公を方ちり。黒く君のん越度  
平城へまえ。父子の間よ。アリ。じまうんとあひし。厚木倉二郎大夫  
これを歎れ。竊よ其が旅宿を訪す。計策を謀ゆ。又咸某が  
手よ貞そ。その夜三勝を奪ひ去。大殿のん憤忽地解橋梓  
和順う。あひたかて六年の春秋。うちて某夫婦召され。又ぐ  
の手を預け。も吾君のんよ。櫻姫のそりでまわひて。田川の  
絶うまく。まづ続井の血絆絶んうと。君も物憂あが。召じる。  
人かのころがづくよ。あらどさる。ねよ。一昨年の初冬。浪速う。千日  
墓よ。某一家。蟻松一族。施行の手を引けし。小集合たる貧人  
乞丐多かる中。年才七八九ある。壯校のひと妻。一く見えなが。  
人の後方よ立躰。施米を受取。腰を下れ。がの面。新竹と  
き。吾君順勝。朝臣よ。う。似く。もうおがく。う。意。も  
とあが。不。去。年の秋。操本の松原よ。某が轍よ。鳥流をうち  
やけられ。時。娘母の自殺よ。愁傷する。壯校ゆく。某そのと先。和途の  
八幡宮。う。う。さ。樹の蔭よ立躰。事の容を張。ハ。と。生。が  
養母。某が母。輪。輪。が妹。晚緒。う。又。壯校。ハ。治。同樹。が。妻の孫  
今市全ハ。が。実。よ。ある。う。ま。一。う。と。口。競。を。ほ。と。ゆ。う

闕窺。彼壯校ひいぬる年。千日墓みく施米と受たる貧人あり。  
それば見るよき音君の面影より肖たり。折しもあれ。曩小周防を  
逐電。厚倉車人（ひらき）もありて。殿鐵の四五六と名告つ。彼壯校を  
勦そ慰め早稲の死骸を鎧櫃（よろいひつ）に納め立つ。彼車人がみ体  
実滌酒（じきしゅ）と氣を忘ど。逐電（よろでん）をぐたりのよあらび。あらうよ彼人牙を  
審（か）。彼壯校死助る。弓の所あるからそと推量。その夜刀を  
打折。某が預たる主君恩賜の小刀を抜（ぬ）。彼壯校が鴟を  
一大刀砍著（うちわざ）。私率丹二が死骸のほどうよ送（おど）したる。  
件の小刀を取る。挑燈の火よつとこれをされば。にじやく君順勝  
朝臣糸谷山の妖氣をそんとく。樓（ろう）よ登りつ。このちん佩刀を走ら  
一ノ膝口（ひぎくち）を突傷。主のとれ。の刀失ふ凝著し。主君の鮮血と

壯校の鮮血とひとくちに聚（あつ）。覗諭と歎親子の證据（せうきよ）。さら  
このちん佩刀を。ぐくもあらじ渴（うなぎ）。丹二より預（あずけ）。ト郎もれども  
丹二が彼君よ傷（いた）。一筆を。隕（おち）。扇（おうぎ）。君かんすを。举（あげ）。ひら  
ひらを。叔母早稲老女が。襁褓（くわう）の中（なか）を。掌（てのひら）を。健氣（けんき）。小  
生育（おいく）。その功（こう）又賞（しょう）。と。と。びと。喜く。又哀（あら）。と。その夜を  
さうれど厚倉車人傳を居れ。郎君のうへ。か安（やす）。と。その夜を  
そのうへ追ひも届（とど）。木精塚（こまづか）を。殺（さつ）。君よ禍（わざ）あらせども。  
隼人（はやし）が所（ところ）と。精（せい）。う。だ。よ。祕（ひ）。人より告げ。閉居恩免の  
日（ひ）を。約（あく）。このちん佩刀を。聚合（あつあつ）。ひえ子の鮮血を。音君よえせ  
あり。あくつよ。ども。あらしだす。吾君ひ夫婦欣歎と談びたす。ひ  
こうこそ。時の過失。老との今。の幸福と。うりね。ふ齡既不

五十よりがりのから。男兒あらをとのとひまう。ひくとくありひしよ。  
ひつと実子を護りし。汝ホガ丹誠よりれど。早稲田ニが後の世を  
叮嚀す。吊ひぬきよ。隼人かみの後日は賞せん。ちびく小弓がまの  
往方を索り。仰つ。又のちん佩刀を預やされ少ひた。かくして大内  
家の擾乱よりて某も。間諜者を多治比山口遣。陶と  
大江の善惡虚實を窺せ。郎君の隼人とも。水上の風と。ア  
在るうを傳す。更に主君の仰を稟。大江家と謀り合せて晴賢を  
討し。内沼多の新闕の角だる比。某窶又當地より來たり。昨今  
括糸菴を旅宿と。兩毛の法会小假托。後より某門の軍兵を  
この處へ集会たり。君の則。晴賢征伐の大内軍全毛を改めて。ノハ  
ヒを続井小太郎順啓と稱し。もとスビ首。大殿の屢々疑念を  
解す。ちん佩刀を受取め。あへ。とかちも。演説し。小刀を引抜て。  
刀尖をうえで進らざれ。順啓の聚合した。鮮血をうち。一打へ。  
と見えやうえつ。鞄よ納め。二扁戴た。腰よ帶。大息吹す。形を更め。  
面目も。赤根又。誘ひ。氏よ。育養母早霜の物ぞうふ。  
コふ。冥文。続井の退程人。今市全八郎。とよみの。こと。笑へ。却て  
これより忠義うれ。半之進親子を。争ひ。と。勤解す。もあまう  
り。隼人ひよ。ちうづじ。欲しき。うき。ど。や。告げし。と。向せ。まき  
厚倉隼人。欣歎。うき。も。い。出。不審。ひよ。う。う。がら。某浪速。ゆき  
と。死。か。下。敗。鐵賣。買。ち。の。君の。面影。を。え。を。よ。順。勝。朝臣。よ  
似。あ。う。大殿。ひよ。う。う。を。の。や。一時。森。流。の。歎。拔。寡。姫。う。ん。ど。と。石。お  
い。ひ。亡。父。二。郎。大。夫。が。物。詣。よ。また。う。す。も。ゆ。ば。ノ。続。井。家。の。落。胤。

三貴文を縛りて危窮を救ひ。そのち操本の松原より自殺をとげ。その又ハ続井の退糧人今市全八郎ある。うそめて實ども面影ハ続井殿又似也。ハ故こそあらあ。と假初より復讐の助大刀主がれ勢ひひ示す。のうち竊々赤根が首とす。周防まで伴ひやゆらせ。只続井殿の落胤うる。證据と云ふ者どり。と年來意つてひし。ひむとさねど半之進。ひもゆられをられ。宴小燈臺根間と。隼人かみと。同蒼まきせん順啓。ナシ。感心斜きうど。かうべ前象うりけん。近ア。夢よゆれ人外だす。軍法劍法弓馬を習。読書も讀を教。四十夜よ及一。九年來ハ一文一字も引きじられ。とぞ。想ゆ。丈武の

道を諳トナリ。ひとも不思議のみゆくも。と宣ハ羊之進。それこそれ祖父順昭公。當代より至るまで。數十年信仰。の志貴の昆沙門の擁護。うきよ。観嚮。又半之進を。驚んと。乍らひな舉動皆悉法よ稱。と馴れ。と御。と。徳。と。善。と。徳。と。善。扇をさと披だ。郎君られ。と。向より順啓。一目よ見え。と。忠臣不事二君。貞女不見兩夫。と書たる。みどりハ齋王獨が讀。本是史記。又出たる。劉向。讀苑。又。この。の。讀。を。哉。たる。讀示。と。あふ。赤根。厚倉。感佩。この。讀。の。常。又。世人の。口。選。の。ど。竹への。讀。ある。と。出處。を。定。よ。もの。稀。神明佛陀の。守。を。と。龍。と。翼。の。名。大。ね。合。勝利。疑。ひ。と。祝。と。厚倉。事。入。又。り。よ。セ。う。布。絶物。よ。托。と。槐姫。と。唐。提。の中。よ。備。と。す。と。と。と。

伴ひすわくセイグ。と  
堪ざぞ壁をぐれ。同胞對面す。ゆとて遠く一庭へり。唐櫻の  
蓋うち開だる。槐姫のあんまを被だ。母屋へ誘ひまれ。頃聲を  
席を譲る。感僕正一。されど年むらうふ芳れど。その母貴く  
きのせんば妹うりとも娘又女。さうも晴賢が逆謀す。而折の  
艱苦を経ゆると痛く。くつをゆと感め。ハ槐姫候を袖ア  
うけかうめ。やくもゆ兄公の面を附むる家の幸ひせよ。憑く  
呂ひゆ。但哀とひべた。初花が。ごくらはよ代主をあみ。横元。おん  
うもあづく。かりの法会の折をゆく。女僧ともすりて亡夫と。るき  
えくの菩提を吊ひる。らゆ。許す。ゆう。とひかとひよ宣へ。お  
あくちとこひき  
厚倉隼人小隣をさうめ。姫君あくす歎たかひ。お花が横元の

彼が情原義基朝臣のゆす秋篠山の御所より。刀を肚窓立  
み。猛火の中へあはらんと。のひと。隆春竊み助あら。公候の  
郎黨。片山里へ隔へやう。療治を。術を。既に  
隼人とあはゆ。がん命恙。遠くどうぞ。夫婦の再会を  
ゆ。進うせん。と慰め。おき。槐姫。原木。が。空天。あれ。の世  
を。在。それ。れぞ偏よ陶五郎が。稀。う。誠ひのあん不。素。いや。  
う。隆春が。裏の。もと短冊を。とう。扇よ。裁く。半之進が。おどり  
ち。近く。これ。を置。只。痛。へ。陶五郎。養父の。達。ひ。を。諒。う。さ。み。も  
腹を。切。る。べ。あ。じ。よ。義基朝臣を。救。い。あ。一。を。ら。ん。み。よ。死。む。死。ど。  
二。ま。い。諫。め。ア。聽。され。が。號。哭。へ。親。よ。後。ふ。本。末。子。た。の。道。あ。れ。

今更コ具非コ及ヘど君命トテシヒテ。友謀人を親トシ。ある。  
隆春が一世の不幸。ソシモアヘテモ身のあつ果ハ竹鋸木の抄小首を  
梶らん。大利ニ在キ親同胞へ恥を送ル朽キトマ。近サセテ隆春が  
志を又母ニ告。すた後ヨリ一扁の回向を憑。と鬓の毛を押切て短  
冊トカク共ニ遍されし。又世よりの像見。それ等ナシと  
指示ハ。半之進その短冊をもよと/or>。

黒髪の乱毛。おぐさう。そらでやぐる。の道。隆春  
とニギビニモヒ吟ト。半七と面をあう。口が子どものうがひざあ。がくも  
苏玉蘇アヘセらねど陶五郎のミ不幸ス。反逆人の事と見る。  
されも過世の葉因あらめ。とりひとつ滾ヒ一滴。かく下恨ミ。半七も  
牙が立ありひす。底を林示。かくぞれが順啓も櫻姫もこれか爲ス。

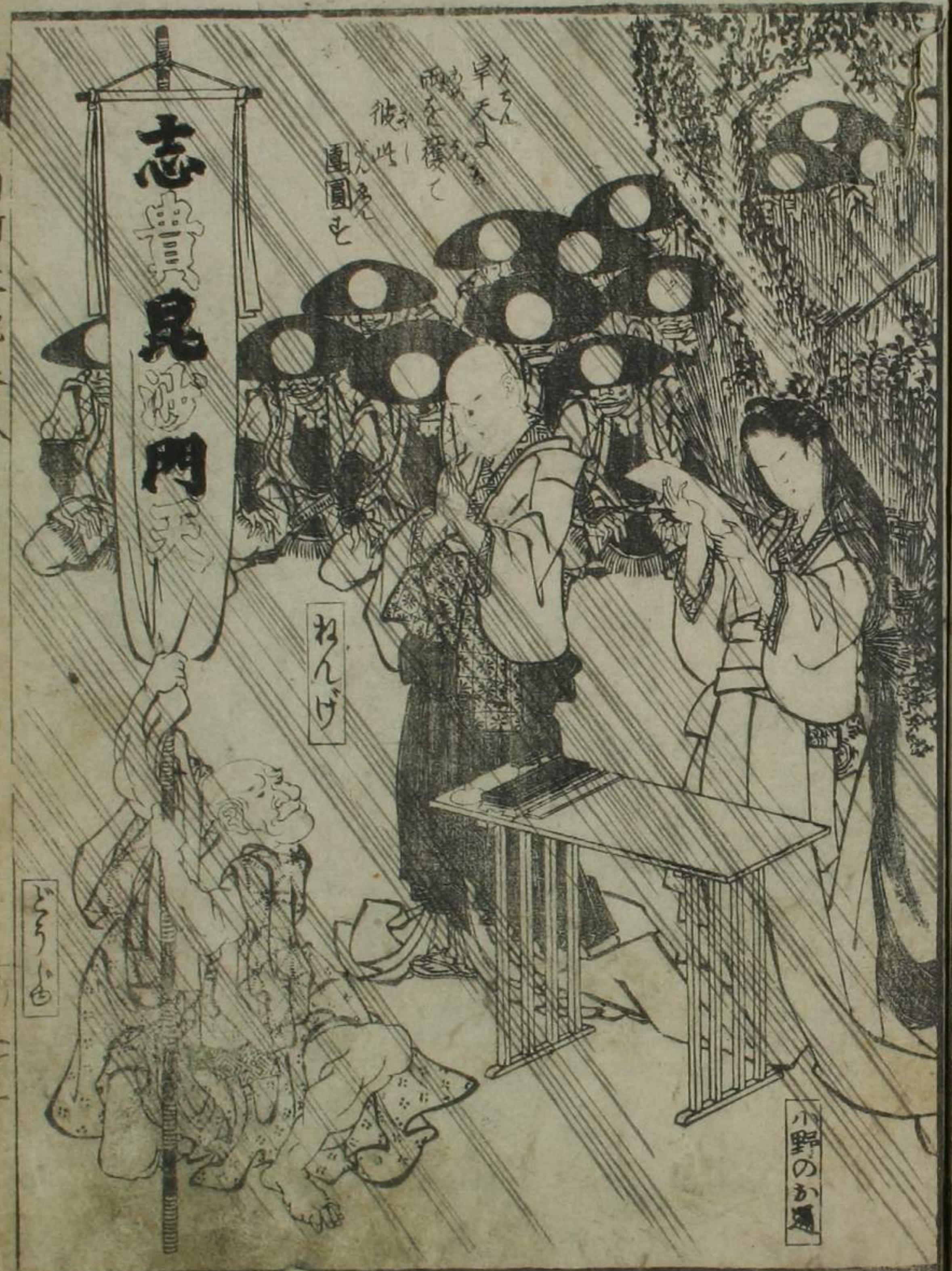
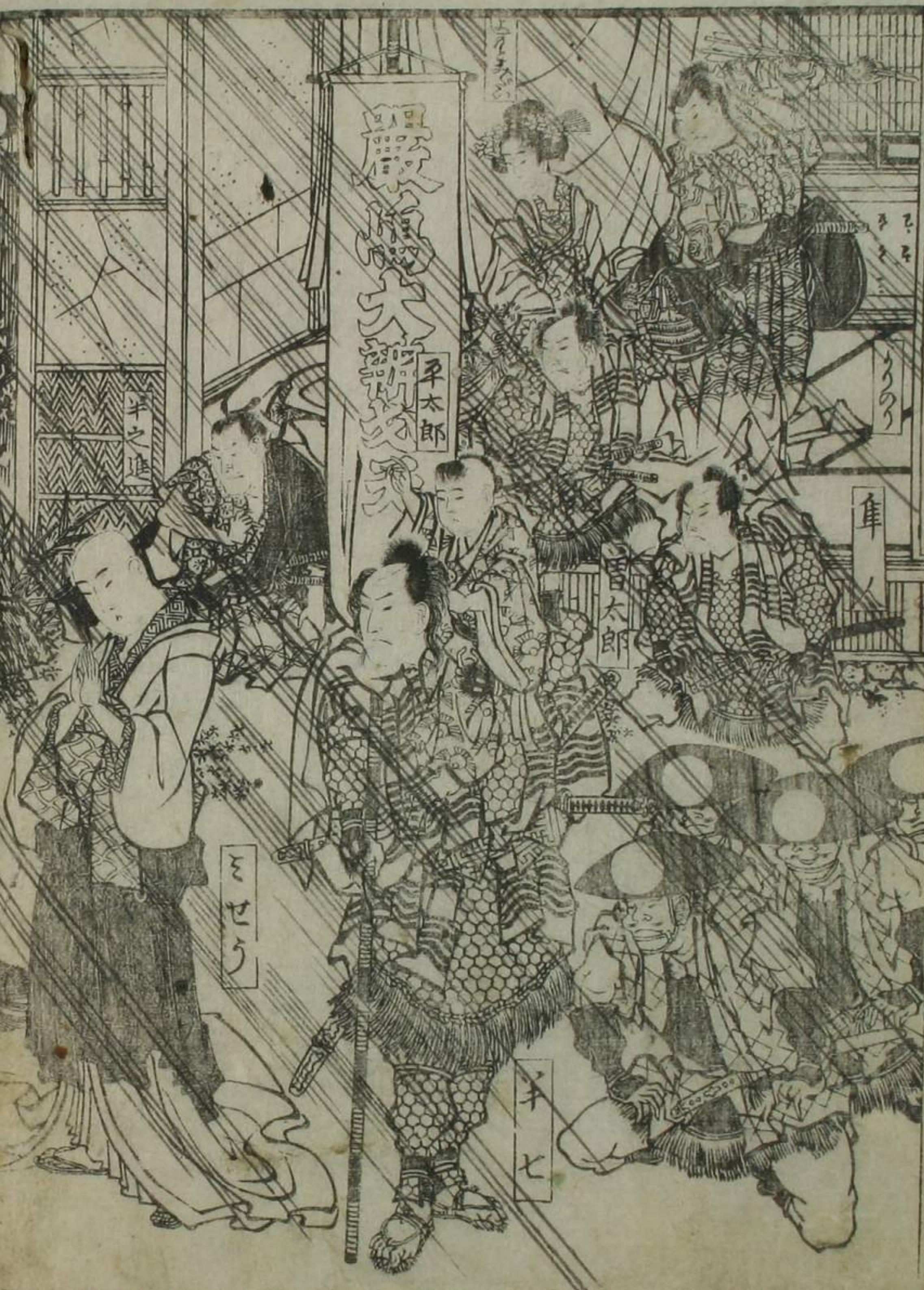
嘆息。目をあけたれあふも。奥より。笑括義徴笑尼を通  
共ニモびかく。声うり立テ。と泣。半之進えうき。郎君の  
出陣。不祥の哭声。奇怪。両女僧ハ付处。在る。が通ナラ共ト。か  
齋一たる。あん被長を。順啓君。進らせよ。とほだつれ。半七  
涙を禁め。括義徴笑が二人。扛りづる。禮様が通ひ。かて蓋  
取。武運を用。く。小桜威。五枚錘の星兜。覗故郷の名。有  
大和錦の陣羽織。小手奴袴。大刀六具。三人。あく。被あわら  
す。頃。塔弓矢。挿ミ床ル。尻をうりあ。のう。咸。有。て。極。あら。  
赤根厚倉。左右。侍立。暗号。の笛を吹。たれ。の。奥。よ。集会。  
糸詣。の構。元。ハ里人。う。ど。も。是。続井。の。兵士。ど。も。甲。重。小。身。を  
固。散。動。う。と。ち。り。出。廣庭険。と隊伍。ア。當。下。厚。倉。食。グ

後者亦も外面より走り來つての櫻をうち披れ體一宿する程  
軍監左右より押立る旗又書たる二天の名号。嚴嶋辨財天女志貴  
昆沙門天王と高坐し唱げ。諸軍衆一拜する折め。校討さくとうを  
す。事の趣からむ。突果たる刀冶同樹へとみ下りゆく。  
慙惡ざんきと。賣子の下り。這出はりと面うげ頭を低七十餘歳の  
父おやぢも欲よ固め五體一心。佛とも法とも辨べ。造じ罪を  
悔なまれ。今やらば忠臣孝子。義夫節婦頃孫の集て。世より  
稀まれる。公操說諦せつだい。清談きよだんを。字ひらがふきが疎さう。又鈍どん  
心こころ。後悔今更その説せつうなれど貞婦を訴歎そくたんす。賣うらんに。  
忠臣孝子を虚うそたる。悪報あくほうの今面おもてり。の竹籤たけのしのぎよはらぬあれん。  
南無阿弥陀佛と唱つ。折たる竹槍たけのやり横取よことり。壯たけつれはらんと  
たじふ。順啓じゆけい。彼禁めふ。と宣のべふ。羊ひつね七しち歩あるきり。竹  
槍たけのやり推すすと。五逆十惡の罪人ざいじん。懺悔ざんげよりの罪滅ざいめつと假あふも  
親おやぢと憑のぞく人の惡念おのなを轉かわす。善よく帰かると。欲ほくと。と坐すわと  
おもおも槍やりの穗ほを棄きす。背せきす。小投捨ことうし。順啓じゆけい。羊ひつねと。同樹どうじゆ  
近ちかく抱いだす。これの襖ふすまの中なか。孤こと。のりのええだ。の父おやぢ  
娘むすめ。去年ううて。お身みみを寄よす。汝なが妻めの恩惠おんわい。又またが妹めい  
提婆だいば。外祖母おとおば。汝なが妻めの恩惠おんわい。又またが妹めい  
敷ひきと。汝なが妻めの德とく。又またが妻めの徳とく。され。凱陣かいじんの時ときを。汝なが妻めの恩惠おんわい  
養母ようぼ。早はや。祖母おとおば。小田井おだい。義女ぎめ。花孝子はなこうし。平作木ひらさくぎ。かわふ。永年えいねんの法会ほうえい

たじふ。順啓じゆけい。彼禁めふ。と宣のべふ。羊ひつね七しち歩あるきり。竹  
槍たけのやり推すすと。五逆十惡の罪人ざいじん。懺悔ざんげよりの罪滅ざいめつと假あふも  
親おやぢと憑のぞく人の惡念おのなを轉かわす。善よく帰かると。欲ほくと。と坐すわと  
おもおも槍やりの穗ほを棄きす。背せきす。小投捨ことうし。順啓じゆけい。羊ひつねと。同樹どうじゆ  
近ちかく抱いだす。これの襖ふすまの中なか。孤こと。のりのええだ。の父おやぢ  
娘むすめ。去年ううて。お身みみを寄よす。汝なが妻めの恩惠おんわい。又またが妹めい  
提婆だいば。外祖母おとおば。汝なが妻めの恩惠おんわい。又またが妹めい  
敷ひきと。汝なが妻めの徳とく。又またが妻めの徳とく。され。凱陣かいじんの時ときを。汝なが妻めの恩惠おんわい  
養母ようぼ。早はや。祖母おとおば。小田井おだい。義女ぎめ。花孝子はなこうし。平作木ひらさくぎ。かわふ。永年えいねんの法会ほうえい

後し。括義微笑の西比丘尼を必大和へ伴ひべし。彼の今より。らの  
草菴よ住ね。お花木が菩提を被。五町八反の良田を寄附し。  
読經の料とあきせん。餘金をあづけよ送れ。と叮寧よ諭。ゆ。  
同樹の感涙滻の如く。頃啓摠姫を伏拜。又平七郎を拜。  
あり。當下平七郎外母括義尼。才婦微笑亦よ。諸多の新聞を詰  
難。うじ日。閨防牌面を恵み。うろこびを述べ顔のりて。変更  
ゆ。されどもあらず立別まつりと愚。よそにげりんとも。弟の  
解を賠詰る程よ。通も八千川の危難を脱きて。うめどり。  
ふを物。されば夏山の平太郎を呼びて。平七郎よ遠一。うめどり。  
時刻もうつねで。平之進天うち仰く。のむる申の時より遠  
かじ。ねう日多治比へ遣へたる。仙野呂東二の事。ぬらど。大江  
家の消息。うよあきらん。ひりとあくひといふ言葉。うよ。荒らど。衝と  
走りある。呂東二道往陣笠取て。跪げば。平之進信とこそ。詔。び  
たじ仙野呂東二。大江家の吉凶。うよ。と小膝をすくめ。問を  
呂東二。嘆の袖を引ひ。うよ。威儀を緩ひ。されば某多治比へ。起  
再三謀。一あひ。されば大江太郎。乙就朝臣密。よ晴賢誅伐の謀を  
せざつ。うよ。どもの便宜をねがじよ。時々。未づれ陶晴賢を  
嚴嶋へ詣る。風声をもく。やれり。のみ。大江続井の  
軍船不意よ起。攻討。晴賢を虜。よもべし。まわれ。しく  
雨。あらねど。宮嶋の邊。子守とあり。自在。よ私を遣め。ぐ。し。  
願。所の只西の。うよ。終日雨。あらば。乙就。晴賢を。饗食。無の  
ば。や。うよ。夫役と。偽り。向道。うよ。嚴嶋へ押すを。彼處を。別面。軍

配をひひあらさんと宣ひ。返書の元とさへせば半之進受取て頃啓よ  
進らすれハ封皮推切て読う。うち。之就の謀畧。その國又當れり。力治  
同樹懶悔。善かよ立つれ。凡ての件よありとあるり。悪人の絶て  
ヨリ只憎むべなり。の晴賢の。もあれども雨あらざれ。容易陶を討は。に  
頼ひ所の天子擁護。括義微笑の讀經。辨財天女戒新れ。と  
宣へ。厚倉車人も立つ。の小野小町の歌を誦じ。雨を獲  
た。今のか通も幼稚。裏鳴の道よけ。秀歌をひき多。と  
かけ。雨乞の歌を詠せ。辨財天女を祝ひ。よりかよ頌啓うち  
兵頭車人。もよけ。天地を動せ。も元来和歌の徳と實り。が  
通ひ。の音うろこ。准備せよと仰せられ。が通ひ。再二辭。しゆうせ。ど。  
槐姫傍。化するも。諭す。姫君の料。も。厚倉が齋。也。  
五衣緋袴。母親られを賜。まづ。が通ひ。推辞。言葉。あく。退て衣裳を  
更括義微笑り。うとも。小庭。よ出つ。半個たる。曲演の。立ち。立。軍  
兵。ふくろ。を。ゆく。轉。よ運。が経机。科紙。硯。を。とり。そえ。准備  
既。よ。整。へ。ひと晴。が。まく。見え。よ。り。かく。ア。括義微笑。尼。ハ。急殊。を  
押捺合掌。能。与。總持。大智惠。聚。大辨財。天神體。そ。是。安藝。國  
招す。郡宮。鳴。又。宮柱。太。く。建。て。祝。れ。あ。市。梓。鳴。姫。の。神德。神威  
空。う。り。ぞ。今。立。地。よ。兩。手。じ。て。続。井。大。江。の。兩。義。兵。よ。力。を。戮。て。な。び。あ。と  
か。通。り。う。た。且。く。念。じ。て。嚴。嶋。を。遙。拜。し。兩。女。僧。ハ。恭。く。光明。經。の。級。を  
解。て。三。遍。戴。冠。廣。宜。流。布。乃。至。得。聞。是。經。當。令。是。等。悉。得。猛烈  
不。可。思。議。大。智。慧。聚。不。可。量。福。德。之。報。と。讀。經。の。声。の。澄。じ。る  
り。も。尊。く。丈。テ。ク。が。通。ハ。小。雲。時。うち。奈。じ。て。墨。搘。う。下。筆。を



深く短冊又詠歌を書載し。筆を闇に。

因を彈く。民の草木のかれやくよめぐみの雨をひそむがん。

かゝり三遍吟づ。目上よ捧まへ天女感夜一なまひゑん。庭の  
水浪うちうる。一天俄頃よ結陰風颶とからむ。彼短冊を  
空中へうたのびす。とぞ見えたり。雷雨俄頃ようりそざ  
草木も人も甦よ。順啓同胞赤根厚す倉天よ珍い地よ喜ぶ。  
同樹えさらう。軍兵あそ濡とも厭ひ。異口同音小あが  
感い止ざり。あくよふよ。不思議うりへ。この雨括糸  
微笑の面を打て。降流と移よ。爛とする火傷の跡洗ふが如く  
愈消す。舊の如くよきしづ。兩女僧の誠公を天女憐みゆめ  
后と下り。傷たる客止のくまよ。愈たることいとありて見

冥助うと。衆皆信公瞻よ。機よ。またのりくかりひ  
あり。頃啓の殊更よ。感悅頗氣色よ。見き括糸微笑が詠経  
の奇特の能因が和歌又芳らどか通が詠歌の小野小町。請雨  
小異あらど。かれの能因の二字をこころう。兩女僧が名ふ被け  
能括糸因微笑と。それを喰ん。まくお通をば。小町よ擬して  
小野小通と唱ふべし。獲うたれ雨をもや。獲たれ時を移さん  
事陣せん。蓑笠の準備せよ。と宣ふ折うち。人馬歩よ直と濡さ  
馳。あらうのあら。是則蟬松曾太郎。うり。柴門よ馬衆捨て。傳  
ひまつ。頃啓槐姫をえく。晚た郎君姫君へまく。トゆく。  
まくも大殿のねる寅の日夢の中よ。昆沙門天新向とく。告  
なまひとあるをりて。今日の夕よ郎君姫君の集合あん

すを知られ。曾太郎を遣されて所う。郎君當家の大お  
軍と。晴賢を參りゆく。金虎も在せば。敵これを侮  
らん欲よくて室町殿へまう。一請。大和みよ任ぢらる。あつ  
姫君の括糸微笑ふ通ふをゆく。一圓平城へ帰館ある。金虎し  
かん迎のねあ上せり。と漁説されば順啓の謹そえの金を兼  
且蟻松をゆきひたまゆ。その隙又赤根親子厚々食ひ義女あ  
禮。先陣後陣と立ゆらべ。微笑ひ涙さへもつ。平太郎が金を  
うそ。半七が側よ推す。ありて祝する忠義を竭ます。じゆく  
きり。又の代よ足よ縁ひよゆくとも此平太郎と佯あへど  
ひひくりこまくうち泣び。半七有罪と平太郎を禮の上よ楚と  
負ひ。親は代て天折ち。才蓋松平作が再び小存金を  
忠義を演る四歳児の初陣。伯父りろ草よ分捕せん。これら  
の念とせぞ。故郷へ帰る。もひひきび。家ある母とてふ在く蟻松  
翁へお花がみを言告てたゞ。とおう。鎧の袖を密と濡せ  
ぬはまく。筆をみてて降ろせば。順啓麾を  
取る。時刻移らばひひぐひ。し就み先せられさん。も  
出陣と促しゆべ。馬取の雜兵が縁嬪ちゆ。幸居。月もの  
駒も西に入る。佛の利益神の加護めでたく凱陣有らず。と送る  
姫君。女僧が通へ。後羅の巷を見捨つ。大和とゆく起程残る  
同樹へ。八重津。あら蓆のう。朱柄の槍の赤根厚々金刀く。  
主を守護して立歩ゆき。

## 古夢南柯後記卷之八 終

飯台曲亭馬琴戲作

葛飾北齋辰政畫



做書

鳴岡節亭

朝倉伊八

鈴木武筍

割廁

木村加兵衛

三七全傳南柯夢

馬琴著

全六冊

三七全傳

白夢

南柯後記

北齋画

前帙四冊

同後

性第三編四冊

賣出一申候

